

『源流茶話』注釈(一)

中村修也*

Annotation of 'Genryu-Sawa' 源流茶話 vol.1

Shuya NAKAMURA

はじめに

茶の湯を研究する場合、主な史料となるのは、茶会記と茶書である。ところが、この両方共に歴史学では、あまり信憑性を認められていない。その原因はいたって単純である。伝来の確かな茶会記が存在しないこと、茶書があくまで後世の編纂物であるということに起因する。つまり第一次史料として認めたい存在が、茶会記と茶書なのである。ところが茶の湯の歴史を探求する場合、一般の文献史料にはあまり茶の湯記事が登場しない。むしろ、これまではあまり注目されていなかったこともあり、ほとんど史料の検索対象とされてこなかった。それゆえ、巷間に知られている茶の湯史料は少ない。林屋辰三郎氏の『図説茶道史』に掲載されている史料が主たる史料といってもよいほどであった。

しかるに近年、茶会記においては永島福太郎氏によって『天王寺屋会記』が翻刻しなおされ、史料の価値も高まった。しかし現在のところ、茶会記で史料の価値が認められているのは、この『天王寺

屋会記』ぐらいで、四大茶会記と称されながら、残りの「今井宗久茶湯書拔」「松屋会記」「宗湛日記」はまだ史料検討が行われていない。ことに前二者は歴史的誤謬も多く散見され、史料としての価値は低いものと評価されている。

だが、これら茶会記は、後の改竄があるものの、一応は同時代史料である。しかるに茶書は江戸時代に入ってから、新たに意図をもって編纂されたものである。それゆえ史料の信憑性はいつそう低いものと考えられている。ことに元禄期前後は、茶の湯界において利休顯彰の傾向が強く、利休神話がたくさん生み出された時期であり、その時期の茶書はとくに気をつけて読まなければならない。利休説話をもっとも多く記録している『南方録』が登場するものも、この時期なのである。

そういつた茶書の中で、『山上宗二記』だけが自筆本と思われるものが存在し、もとも信憑性の高い史料として認められている。『山上宗二記』は茶の湯の由来、名物道具集、茶人伝、利休秘伝より構成されており、初期の茶書としては非常にまとまったものであり、かつ稀少な記録である。そのため、早くから茶の湯史料としては注目を集め、研究も一番進んでいる。

だが、『山上宗二記』の研究に比べて他の茶書の研究ははるかに遅れている。極言すれば、現在研究が進んでいるのは、『山上宗二記』と『南方録』の二書が主であり、他には『今井宗久茶湯書拔』『天王寺屋会記』『松屋会記』『宗湛日記』の四大茶会記を数える程度である。諸流派でそれぞれの流派の史料は検討されているのであろうが、自流派の史料を批判的に読解することは困難である。

茶書を一次史料とみなすことは難しいが、十七世紀以降、膨大に

* なかむら しゅつや 文教大学教育学部

板行された茶書を無視するのも茶道史研究としては問題がある。茶書は従来書の引き写しや孫引き、伝承・逸話の創作などの面が否定できず取り扱いが難しい。また、茶の湯作法についての記事も多く、一般研究者には解読困難な点もある。

その中で、歴史的部分を排除して、同時代的な記述、あるいは思想的記述を中心に茶書を検討することは一つの有効な手段と考える。つまり、茶の湯の濫觴的部分は除外して、その茶書が書かれた時代の茶の湯のありかたを知る史料として考えるのである。たとえば元禄期前後の利休・頭彰傾向にしても、なぜその時期に、そのような傾向が生み出されたのかを考える必要がある。その検討材料として、藪内竹心の著した『源流茶話』は最適な対象物と考える。

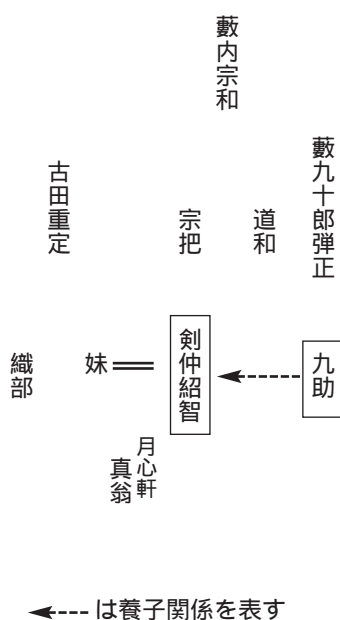
藪内竹心

まず、『源流茶話』の著者藪内竹心はどのような人物で、何を目的として『源流茶話』を執筆したかを考える必要がある。

しかし、千家にしても天王寺屋にしてもそうであるが、室町末期から茶の湯で著名となった家でも、その出自が明らかかな家はほとんどない。藪内家もその例に漏れず、出自は不詳である。これまでの研究によると、初代剣仲(天文五年 一五三六)〜寛永四年 一六二七)は、武家の次男として生まれ、藪内宗把の養子となり、藪内家一世となったという。最初、養父宗把に茶の湯を学ぶが、後に武野紹鷗に師事し千利休と兄弟弟子となったという。剣仲は紹智とも称するが、これは紹鷗の「紹」の一字を頂戴したもので、藪内家では代々紹智を襲名している。その意味では、藪内家にとって、源流とすべきは千利休ではなく、武野紹鷗である。しかるに『源流茶話』

では、竹心は専ら源流として千利休を讃仰しており、矛盾がみられる。

藪内家略系図(『原色茶道大辞典』をもとに作成)



ある意味で、竹心は藪内家としての源流よりは、元禄期以来の利休・頭彰という茶の湯界の流れに便乗したともいえる。つまり、江戸初期の武家茶道に影響を与えたのは、あくまで利休であって紹鷗ではなかった。紹鷗は数寄の中興として利休に影響を与えたが、問題は元禄期の社会が認知している茶の湯の「源流」が誰かということなのである。本質的な源流論では、世間に与えるインパクトは弱いのである。この時点では、源流は何がなんでも利休でなければならなかったのであろう。

流祖・剣仲に関する史料ももとより少ない。「宗及他会記」元和二年(一六一六)十一月十日の条に、

一元二酉辰十一月十日 於糸や九郎右衛門所 駒蹄見申候、

是八前堺北材木町より出一期、紹智取候て、九郎右方へ登也、

表1 藪内関係茶会

年月日	亭主	客1	客2	客3
天正6・4・24	津田宗及	天神春盛	光明院康因	藪内宗和
天正6・12・6	津田宗及	天神春盛	光明院康因	藪内宗和
天正7・2・4	藪内宗和	光明院康因	銭屋宗訥	津田宗及
天正7・11・14	藪内宗和	津田宗及	山上宗二	
天正7・11・20	千利休	津田宗及	藪内宗和	

同月二十日の利休朝会に、「やぶの内道和」が宗及と二人で出席しているのが「宗及他会記」で知られる。宗和・道和二人の存在によって、藪内一族も茶の湯に親しんでいたことが確認できる。しかし、その茶友は広いものとは思われない。『天王寺屋会記』に見える宗和関係茶会を見ると、その客組みは、千利休・津田宗及・山上宗二・天神春盛・光明院康因の五人に限定されてくる(表1参照)。ことに天神春盛・光明院康因の二人と同席のことが多い。天神春盛とは堺天神社の安楽寺の僧侶舜盛のことで、光明院康因としばしば茶会に同席している。

初而見申候、大サ拙子(宗玩)所持之駒蹄ヨリ二分程も大ニ覚候、ナリ八似申候、口ツクリカワル事ナシ、(後略)

とあり、糸屋九郎右衛門の茶入に関する話題に登場する。紹智ではないが藪内宗和は何度も『天王寺屋会記』に登場する。まず「宗及他会記」天正七年(一五七九)二月四日条に、
同二 四日朝 やぶの内宗和
康因 宗訥 宗及

炉 のかつぎ 手桶 如常、
茶過テ、墨跡 薄茶之時、天目、ハイカツギ、但客所望也、

とあるのが初見であり、同年十一月十四日にも宗和は宗及と山上宗二の二人を茶会に招いている。また同年

この藪内宗和・道和と初代剣仲がいかなる関係にあるかはまったく不明である。また、紹鷗門下とされる剣仲がまったく天王寺屋関係の茶会に登場しないのも不思議である。ただ、利休の藪中斎(紹智)宛書簡は多く、現在では十三通が確認されている。利休書簡を見る限りでは、両者は親しく交際していたようである。『茶話指月集』には、利休と剣仲が雪の夜に両者とも懷中に香炉を潜ませていたという、二人の息の合った逸話が載せられている。事実関係はともかく、利休と剣仲がそのような仲の良い関係であったことの反映と考えることは、先に見た書簡の数から言っても、それほど的外れではあるまい。

だが、剣仲が紹鷗の門下であったとか、後に利休に教えを請うたという事実は史料的には確認できない。天正八年十二月の藪内紹知宛の利休伝書なるものがあるが、「利休伝書に登場する利休は、既に造られたものとしての性格を拭ひ難い」という戸田勝久氏の指摘どおり、これらを事実とみなすことはむづかしい。当時、堺衆と広い交際をもった天王寺屋の茶会記にも藪内剣仲が登場しないことは、茶人としての剣仲の存在を稀薄なものにさせる。利休書簡の存在から、実在性は問題なく、茶の湯との関わりも無縁ではないことは容易に認められるが、茶の湯に執心するほどの茶人であったという人物像は浮かび上がってこない。

その後、藪内家は二世真翁 三世剣翁 四世剣深と直系が続くが、四世剣深に男子がおらず、娘婿として五世竹心を迎えたという。そして藪内家が茶家として隆盛を極めるのは、五世竹心の代になつてからと考えられている。初代剣仲が利休と親交の深かつた茶人であったものの、その茶の湯についてはまったく不明であることを考えると、竹心が初代剣仲やその師匠とされた紹鷗を源流とせず、利休

を源流としたことの意味が、ぼんやりとはあるが、いくらか理解されてくる。

竹心その人の出自は不明であるが、もと美濃大垣藩の儒者とする説、京都の医家の出身とする説、西本願寺門主の典医南条紹三の子とする説などが出されている。いずれにしても説が分かれるということは、四世剣溪の実子である可能性は低い。

婿養子と考えられる竹心が藪内流の中興と評価されるのは誰もが認めるところである。ではなぜ竹心が中興とされるほどの活動を展開したのであるうか。西山松之助氏は「この五代目宗匠藪内竹心が、藪内流の茶道理論ならびに実技を体系化したその根底になったものは、その当時著しく変貌した千家をはじめとする諸流茶道の批判に発した、強烈な利休帰意識であつた」と、竹心の原動力を分析している。

また、筒井紘一氏は、西山論を認めたうえで、「竹心の批判は、藪内流の正系をのべよつとしたところに発するものであり、茶道そのものに対する批判ではなかつた」と竹心の目的を指摘する。それは至極当然のことであるう。谷端昭夫氏によると、竹心は『源流茶話』をはじめとして一七冊もの茶書を著述している。これほどの多数の茶書を茶道批判のためだけに書けるものではない。本流たる藪内流に門人を導入せんがためである。その竹心の考えの実体化したものが真仰状である。

真仰状之事

茶法之古流利休居士御改正によつて、茶道大成仕、尤近世之諸流、茶道にあらざる事至極仕り大切之道に奉存候、左候へば、利休居士を真仰可仕儀得心感誠仕、随分心底二入正道を流布仕利休居士を供養尊敬可致候、仍而真仰状如件、不住齋竹心敬白

竹心は藪内流を利休の正風とし、その利休を供養尊敬し、真仰することを誓約する神文誓詞として「真仰状」を門人に提出させるといふ演出を行ったのである。

そのうえで竹心は門人に藪内流の相伝を与える行動に出た。西山氏によると、四世剣溪までは相伝については「きわめて厳格で少数の者にしか与えられなかつた」ものを、竹心は茶道を渡世家業とする町師匠に対しては比較的相伝をゆるやかにしたといふ¹¹⁾。諸流派が源流たる利休の教えを忘れていくことに對して強烈に批判しながら、自流の門弟には相伝を緩やかにする。これはまさに藪内流の門弟拡大をはかる行動と考えられる。

『源流茶話』の成立

藪内竹心の門弟拡大の動きは、竹心ひとりのものではなかつた。竹心が藪内流発展のために奮闘するに到つた原因は、江戸前期の茶の湯界の変貌に起因する。

今、簡略に利休以後の茶の湯界の動向を、先学の研究に則つて概観してみる¹²⁾。利休死後、古田織部・小堀遠州が武家茶道を確立し、大名茶が成立する。その後、寛文五年十一月に片桐石州が將軍家綱の御道具奉行を務め、「石州三百ヶ条」の献上により將軍家茶道指南の地位を獲得すると、將軍に做つて多くの大名・武家が石州流に改めるようになった。

石州流の広まりは、武家社会に茶の湯そのものが普及することに寄与した。また茶道を初めとする遊芸が武家の就職にも有利に働くといふ現象を生ぜしめ、そのことが茶道指南をいつそう必要とする現象を生んだ。そのことと相俟つて、茶道の大成者である利休へ

の讃仰思想を生み、さらに利休の子孫である千家に対する重視の傾向が生まれた。宗旦は仕官しないものの、三人の息子はそれぞれ宗守は高松松平家に、宗左は紀州徳川家に、宗室は加賀前田家に仕官した。また宗旦四天王の山田宗偏は三河吉田藩に、藤村庸軒は藤堂藩の茶道師範に迎えられている。

このような莫大な武家茶道人口の増加は、当然の事ながら民衆の茶道人口も増加させ、いつそこの町師匠の需要を生み出した。また、各藩の閉鎖性と完全相伝性が多くの独立流派・家元を生み出した。また、茶道の閉鎖性と完全相伝性が多くの独立流派・家元を生み出した。茶道の手引書や来由書が、当時の木版印刷の盛行とも連動して、次々出版された。寛永三年（一六二六）に『草人木』が板行され、万治三年（一六六〇）に『古織伝』が、元禄三年（一六九〇）に『茶道要録』が板行されるといった具合である。表2を見ていただければ十七世紀後半から十八世紀前半の出版状況が理解されると考えられる。

茶の湯の普及は門人確保の運動を引き起こし、自らの権威の正統化運動へと進んだ。また幕府が諸家の系譜の整理を行う中で、家康と利休の関係を、紀州徳川家を通じて表千家に尋ね、その結果、承応二年（一六五三）に『千利休由緒書』が提出されたことなども影響する。熊倉功夫氏の指摘するように、自分が正統な茶流であるという意識は、宗旦四天王の藤村庸軒・山田宗偏にもみられる。¹³ 庸軒著の『茶話指月集』の冒頭部分のみよう。

今、宗旦より利休の台子直伝は、藤村庸軒一人存命の由。此の人、若かりし時、古織を学び、遠州公に親炙す。強年に及んで千家の蘊奥を探り、齡八十を過ぎて、一日も炉火を断やさず。加之、平日書を読み、詩を題する事を好む。暇ある時は、茶

匙・竹筒を製して俗事に涉らず。門流甚だ多し。

実技として古田織部・小堀遠州の茶を学び、利休の台子点前の直伝を伝授されており、千家の奥伝まで学んだという庸軒の自信は相違なものである。自分こそが利休流の正統であるという意識が如実に読み取れる。

山田宗偏は、『茶道要録』「利休伝」奥書に、

一右別休子ガ事迹、往々二語り伝へ、又鼻肩鼻肩ノ衝説又八誹謗スルノ説多シ、因テ実説ノ一篇ヲ書シテ、世人一事ヲ知テ疑ヒヲ散セバ、幸ナラント、以テ筆スル所如件、

と記す。ここでは茶道の実践面ではなく、利休事跡の正確な伝承者が問題とされている。利休の事跡とはすなわち利休の作法・手前を正確に伝承していることを意味し、結局は利休流の正統な継承者を自負していることにほかならない。

このような傾向は杉木普齋の『普公茶話』にもみられる。熊倉氏は、彼らの主張に共通するのは、「彼らが血脈を持たぬ故に、点前伝授をもって正統とする強烈な意識」であり、それが彼らの「対社会的活動をすすめるべきの存立基盤」であったと指摘する。¹⁴

千利休の聖人化が起こり、利休との関係における自流派の正統化が生じ、諸流派の勝手な主張、茶書の板行が盛んになると、茶の湯の普及と共に、茶の湯の遊芸化が進み、その結果、反動として遊芸化に対する茶の湯批判も生じてくる。そして批判の基準はやはり「茶聖」利休との対比にあった。

元禄三年（一六九〇）は利休百回忌にあたる年であった。その年に『南方録』が発見される。そして『南方録』こそが利休の事跡をもっとも詳しく伝える伝書であった。『南方録』は利休回歸思想の終着点であったといえる。

表2

和暦	西暦	山田宗偏	藤村庸軒	杉木普斎	遠藤元閑	藪内竹心	その他
慶長 18	1613		久田宗栄の次男として誕生				
寛永 1	1624		この頃藪内真翁に入門				
寛永 3	1626						「草人木」刊
寛永 4	1627	誕生					
寛永 5	1628			伊勢に誕生			
寛永 18	1641		この頃宗旦に入門				
寛永 19	1642	遠州より印可		宗旦に入門			「茶聞書」成立
正保 1	1644	宗旦に師事					
正保 2	1645		遠州茶会に出席				
正保 4	1647						小堀遠州没
慶安 2	1649		山崎闇斎に師事				三宅亡羊没
承応 1	1652	宗旦より皆伝、隠居					
承応 2	1653						「千利休由緒書」
承応 4	1655						藪内真翁没
明暦 1	1655	小笠原家に仕官					
明暦 2	1656				岡部道可に入門		金森宗和没
万治 1	1658			宗守より極真台子伝授			千宗旦没
寛文 2	1662						「江岑夏書」成立
寛文 11	1671			御使公用止む			
寛文 12	1672						宗左没、「茶湯初心抄」刊
延宝 3	1675	「茶道要録」著	「庸軒詩集」始まる	宗守より茶花伝授			宗守没
延宝 6	1678		慈母二十五回忌			誕生	
延宝 7	1679	「茶道便蒙抄」著					
天和 1	1681		「反古庵庸軒茶之湯留書」「反古庵茶会」始まる				
天和 3	1683		亡妻三十三回忌				

貞享2	1685		「月詣和歌集補遺」著				
貞享4	1687		「庸子へ参ル茶之湯留」 始まる	「茶湯棚之飾置合習法」 著述			久田宗利没
元禄3	1690	「茶道便蒙抄」板行					『南方録』発見
元禄4	1691	「茶道要録」板行			「茶湯三伝集」上梓		表千家随流斎没
元禄8	1695		久須美疎庵『茶話指月 集』著				
元禄9	1696				「茶湯献立指南」刊		「茶湯献立指南」
元禄10	1697	小笠原家を致仕		佐々木弥七郎宛伝書、 「茶会香炉之事」著	「茶湯評林」刊行		「利休茶湯秘伝書」刊
元禄11	1698	江戸に転居					「茶之湯故実奥儀鈔」
元禄12	1699		9月17日没87歳				貝原益軒著「三礼口訣」
元禄14	1701	「利休茶道具図会」板 行	「茶話指月集」刊			この頃『源流茶話』成 立か	
元禄15	1702				「茶之湯六宗匠伝記」 刊行		赤穂浪士討入
宝永2	1705						如心斎宗佐誕生
宝永3	1706			6月没79歳			
宝永5	1708	4月2日没82歳					
宝永6	1709				「茶之湯綱目」刊行		
享保1	1716					織部百回忌営む	
享保3	1718						関竹泉「茶道真向翁」著
享保4	1719						川上不自誕生
享保7	1722					「茶道朱紫」板行	有岡道端「茶道」
享保8	1723						「茶道望月集」成立
享保11	1726					剣仲百回忌営む	「茶道口訣之相伝書」跋
享保12	1727						野本道玄「茶教字実方 鑑」刊
享保13	1728						三谷宗鎮「和漢茶誌」刊
元文5	1740					利休150回忌営む	渡辺立庵編「石州流茶 道見聞書」
延享2	1745					没する	
宝暦1	1751						如心斎没する

『源流茶話』はこれらの茶の湯界の動向を真正面に見据えながら書かれたものと考えてよからう。石州流野田派の渡辺立庵が編述した『石州流茶道見聞書』(元文五年 一七四〇 成立)に「千家ヲ上流ト云、藪ノ内ヲ下流ト云、宗佐ヲ表流ト云、宗室ヲ裏流ト云、近世且座・花月 宗守ヲ武者小路ト云」と記されている。これは十八世紀前半には、千家が上流、藪内家が下流と称せられ、京都の大茶家として意識されたことと、千家がそれぞれ表・裏・武者小路流と分かれたことを意味しよう。⁽¹⁵⁾

しかし、千家が「上」であるのに対して、藪内家が「下」であるのは、竹心としては面白くない呼称であつたと思われる。もちろん「上流」「下流」の名称は、千家が上京に、藪内家が下京に住じたという、居住地による呼び分けにすぎないが、上・下のもつ本来的なイメージは払拭したい。ことに室町時代の京都の居住区が、上京に富裕な上層町衆が住み、下京は庶民の住む地域であつたことのイメージもまだ残っていたと思われる。そしてなにより、千家は利休の家筋であるという絶対的な強みを持っていた。それに対抗し、上・下のイメージを払拭するには、理論しかなかった。『源流茶話』の誕生である。

『源流茶話』は上・中・下の三巻から構成されている。著述年代は不明であるが、『茶話指月集』を批判している箇所があることから、元禄十四年以降享保頃の成立と考えられる。上巻には全部で五五項目の話が掲載されており、第一項目の「源流茶話序」以外はすべて問答形式で叙述されている。第二項目から第七項目までは喫茶の由来、日本における茶の湯の濫觴、数寄の成立過程、諸流派批判が述べられ、第八項目以下が「茶具問答」となっている。

中巻は全部で四五項目から構成されている。第一項目から第三

項目までは「見聞問答」として上巻同様に問答形式で叙述が進む。第三項目から第四五項目までは「茶人或説」と題して古人の茶の湯に関する説を紹介するかたちで記されている。

下巻は項目の切り方がむづかしいが、三三項目とした。第一項目は下巻の序文的な文章である。続く第二項目は「言行部」の序文である。第三項目から第一九項目までは能阿弥から始まり千宗旦までの茶人伝をなしている。ここに千家では利休・道安・宗旦の三人だけが取り上げられており、少庵については記されていないのは興味深い事実である。竹心には、利休の茶は道安に引き継がれはしたが、少庵に継承されたとの意識はないのかも知れない。そして京都の千家では、少庵を飛ばして孫の宗旦に引き継がれたと考えていたのかもしれない。第二十項目からは「詞歌」と題して、「心の文」などの茶の湯史料が第二九項目まで続く。そして第三〇項目は「唐賢茶事詠略」として中国文人の茶を詠んだ漢詩史料を掲載する。第三一・三三項目は漢詩に対する感想と和漢の比較である。

註

- (1) 林屋辰三郎『図録 茶道史』(淡交新社、一九六四年)。
- (2) 永島福太郎『天王寺屋会記』全七巻(淡交社、一九八九年)。
- (3) 桑田忠親『山上宗二記の研究』(河原書店、一九五七年)が早期の研究として挙げられる。近年では茶の湯懇話会による『山上宗二記研究(一)』(三)『(三徳庵、一九九三年)』(七年)が出され、研究水準を一気に高めた。
- (4) 木芽文庫が『茶湯 研究と資料』誌上において一九六九年以来、茶書の復刻を行い、近年では野村美術館・茶の湯文化学会が

『紀要』において茶書の復刻を掲載している。

- (5) 林屋辰三郎他編『角川茶道大事典』(角川書店、一九九〇年)。
- (6) 千宗左他監修『利休大事典』(淡交社、一九八九年)。
- (7) 戸田勝久『武野紹鷗研究』(中央公論美術出版、一九六九年)、二五三頁。
- (8) 西山松之助『家元の研究』(吉川弘文館、一九八二年)、三九〇頁。
- (9) 筒井紘一『茶書の系譜』(文一総合出版、一九七八年)、二七四頁。同『茶書の研究』(淡交社、二〇〇三年)。
- (10) 谷端昭夫「藪内竹心と『茶道霧乃海』」(『研究と資料 茶湯』一三三号、一九七七年)。
- (11) 西山松之助『家元の研究』(吉川弘文館、一九八二年)、三九二頁。
- (12) 西山松之助「大名とその周辺」「京の四流」(芳賀幸四郎他編『図説茶道大系』第二巻所収、角川書店、一九六二年)、村井康彦「近世茶道の展開」(『茶道聚錦』第五巻、小学館、一九八五年)。
- (13) 熊倉功夫『寛永文化の研究』(吉川弘文館、一九八八年)、三〇九―三二〇頁。
- (14) 熊倉(13)書、三一〇頁。
- (15) 筒井紘一「上流の茶と下流の茶」(『茶道聚錦』第五巻、小学館、一九八五年)。

『源流茶話』注釈

凡例

- 1 『茶道古典全集』第三巻所収の『源流茶話』(藪内家収蔵本)を底本とした。
- 2 ルビや漢字・仮名遣いも底本に準拠した。
- 3 便宜上、上・中・下巻ごとに通し番号を付し、小項目に分けた。
- 4 一項目が長い場合は、枝番号として と 番号を付した。
- 5 原文割書きは「」の中に入れて本文と区別した。

1 源流茶話序

源流論

一、源ハ一流なれと、支流とワかれ、或は浅く或は深く、或は清く或は濁れるに似たり、有ル人之いへらく、濁れるを避てすめるにむべしと、余おもへらく、下流の清濁ハ異なりといへとも、源は皆一流なれば、濁れるをすめるに導き、同じき本源の清浄ならんと欲するもの也、

【大意】

(昨今の茶の湯の状況をみると)水源はもともと一つであるが、(流れるにしたがって)支流に分かれて、ある流れは浅く、またある流れは深く、ある流れは清く、またある流れは濁っているといた水の流れる様に似ている。ある人の説に、(流れが濁っているならば)その濁った流れは避けて、水の澄んだ所を選んで汲むべきであると考えます。私の考えでは、下流における清濁の違いはあっても、本源はみな同一なのだから、濁った流れも澄んだ流れに導いて、本来の同じ清浄な流れとしてあげたいものだと考えます。

【解説】

茶の湯の流派が多数出現していた元禄・享保期の状況に対する批判が冒頭に述べられている。諸流派の中には、清流と濁流があり、清流に属する茶人は濁流の流派を清流に導くべきである、というのが竹心の主張と考えられる。その清流とは、もちろん数内流の茶の湯を指す。

ある人の説は、これから茶の湯を学ぶ人は、濁流の流派を避けて清流の流派の茶の湯を選んで学ばよというものである。これでは竹心は満足できないのである。ある人の説は、竹心にとっては否定はしないが、消極的すぎるのである。もっと積極的に、自分では気づかずに濁流に身を任せている人々を、清流に導いて正してやらねばならないという強引さをもっている。

この茶の湯の流派を水の流れに例えるのは、すでに『南方録』の「岐路弁疑」に見られる。その冒頭部分を引用すると、

古徳のいはゆる、水源をきはめざるものは、流派の清濁をわきまへずと。その言のあざむかざることしかり。凡点茶の一道、普広院、慈照院の両公、長じ好事に、この時専敵重の茶式行れしより、能弥、珠光の流、伝々して紹鷗、利休に至り、露地草庵の清規は、鷗休の煨煉に出て、世に流布せること、今また贅するに及ばず。その下も、古田織部、小堀遠州等に至れる次第、壺中炉談につまびらかなり。

とある。ここでは茶の湯の本源を武野紹鷗と千利休の二人に求めているが、竹心は後に明らかなように、利休一人に本源を求めている。

源流茶話の構成

一、茶話全部三巻、上巻一和漢茶之由来、二茶会之濫觴^{ランショウ}、三二中興大成之次第、四二諸流之辨、五二茶席茶具之説、中巻二近世見聞の問答、下巻二珠光・紹鷗・利休茶系之略傳^ト并二和漢茶事詠略。

【大意】

一、茶の湯に関する話をすべて三巻にまとめた。上巻には(全部で五項目を取り上げた)、第一に中国と日本の喫茶の由来に関する話、第二に茶会の始まりについての話、第三に茶の湯の中興(が武野紹鷗によつて)と大成(が千利休によつてなされたこと)の経緯についての話、第四に諸流派のそれぞれの主張についての話、第五に茶席・茶道具の説明を載せた。中巻には、近來の茶の湯についての見聞とそれに関する意見を記した。下巻には、珠光・紹鷗・利休のそれぞれの茶の道統について略伝と和漢の茶に関する詩の略述を掲載した。

【語釈】

中興・大成：中興は武野紹鷗を指し、大成は千利休を指す。第三項目に「珠光を茶祖とし、紹鷗を中興とし、利休を大成之法祖とあふぎ申事二候」と記されている。

珠光：応永三〇年(一四三三)〜文龜二年(一五〇二)五月十五日。経歴不詳であるが、『山上宗二記』などには奈良称名寺の僧侶で、能阿弥を通じて足利義政に茶の湯を伝授したと記されるが作為性があり、信頼できる記述ではない。古市播磨宛の「心の文」が有名だが、これも伝存せず不詳。大徳寺真珠庵に残る「真珠庵開香錢帳」(一四九一)と「一休三十三回忌祖師忌帳」(一四九三)に

「殊光」の署名がある。

紹鷗：武野紹鷗。文龜二年（一五〇二）～弘治元年（一五五五）。室町時代の堺の町衆。通称新五郎。名乗りは仲材、号は一閑、大黒庵。父は信久、母は興福寺の衆徒中坊氏の女。三条西実隆に和歌を習い、「詠歌大概」を伝授される。名物を多く所持し、堺において独自の茶の湯を展開した。

利休：千利休。大永二年（一五二二）～天正十九年（一五九一）。戦国時代の堺の町衆。幼名与四郎、号は宗易、抛筌斎。最初、信長の茶頭となり、ついで秀吉の茶頭兼相談役となるが、大徳寺山門における木像事件で切腹を命じられる。利休が果たした茶の湯の改革は多岐にわたり、茶室・茶碗をはじめ点前の簡素化なども推進し、武将の支持も多く得た。

【解説】

第一の和漢茶の由来は、上巻第二項目の第一条から第三条に記されており、第二の茶会の濫觴については同項目第四条に述べられている。第三の中興大成の次第は第三項目と第四項目に記されている。第四の諸流の弁は第五・第六項目に記されている。そして第七項目以下がすべて茶席・茶具の説である。中巻以降は、本論で触れた。

執筆の目的

一、此草子ハ、他と長短讎譽をあらそひ、評論のために八あらず、初心の人、茶道の本源を知らずして、猥ニ末流を弄し、法を乱り、道を失ふが爲に書レ之、讀人察レ之、

【大意】

この冊子は、他流派と長短・毀譽を争ったり、他流を批判するために書いたものではない。（その叙述の目的は、茶の湯の）初心者が茶の湯の本源を知らないために、誤って（茶の湯の）末流を（学んで）弄び、法式である作法を乱したり、（茶の湯を行う本来の）目的を見失ったりすることがあるので、（そのようなことがないように）この冊子を書いたのである。読者はこのことをよく理解してほしい。

【解説】

ここには、本書執筆の理由が開陳されている。しかし、茶の湯の本源を數内流として、他流派を「末流」と決め付けている点では、公平な立場とはいえない。しかも対象読者を「初心の人」と限定しているが、では「濁れるをしつめるに導」くことあつたはずである。濁つた他流派の茶人も清流である數内流に導く目的が、ここでは消えてしまっている。

また、「他と長短讎譽をあらそひ、評論のために八あらず」と述べているが、第五項目で「古織八実なれとも花ヨカラズ、遠州八花うる八しけれと実よからず、宗旦八竹の緑なれとも花なきかことくにて、おのく其風体、かれを得れば是をうしなふに似たり」と、織部流・遠州流・宗旦流をそれぞれ比較しながら、最終的には三流ともに批判している。これはすでに「茶道霧乃海」にも見られる傾向である。

「茶道霧乃海」冒頭部を引用しよう。

一利休没後故有て適家八身を日潜め適伝は口を閉ツ、このゆへ二休乃正風暫ク鳴を止て古織時を得給ひ其風世上二流布せり、古織故有て没後宗旦の風二かハリ遠州の流二つつり一時の風流代々二変じて正風二かへらず、今や三子の風儀其伝家々二残る

といふとも古二しかず、

諸流といつても標的は織部流・遠州流・宗旦流の三流に定められていることが明白である。ここで宗旦流という表現がであるが、千家流でないところが注意を引く。今日の理解では、宗旦は利休の孫であるから、宗旦流つまりは利休流ではないのかと考える。ところが宗旦流という表現は竹心の独創ではなく、一般的にそのように呼ばれていた。山科道安の『槐記』の中で近衛家熙は次のように発言している。

今ノ世ノ宗旦流ト云モノ湯ヲ汲テ溢ル、コトヲ厭ハズ、溢スヲ本トスルヤウニ覚ヘタルハ、異ナコトナリ

(享保十三年十二月十一日)

宗旦流を異流と考える向きは一人竹心だけではなかつたのである。ただし、『槐記』における宗旦流の使用は、裏千家を指す場合が多い。他の表・武者小路の茶の湯を宗旦流と表現することはあまりない。竹心のいうところの宗旦流も同様に裏千家を意味する可能性が高い。それは表千家が不審庵を継ぎ、利休の流れをそのまま宗旦より受け継いだのに対して、裏千家はまさに宗旦晩年の今日庵を継ぎ、利休というよりは宗旦の独自性を引き継いだという経緯と符合するものである。久田家が表千家五代随流斎、六代覚々斎にそれぞれ親族を入れたことを考えると、久田家初代宗栄の次男であつた藤村庸軒の千家における位置は重い。兄宗利の次男が表千家の五代目となり、兄の孫が六代目になっているのである。反対に宗旦に直接千家流の茶を学んだ庸軒は、随流斎や覚々斎にとつて師事すべき存在であつた。

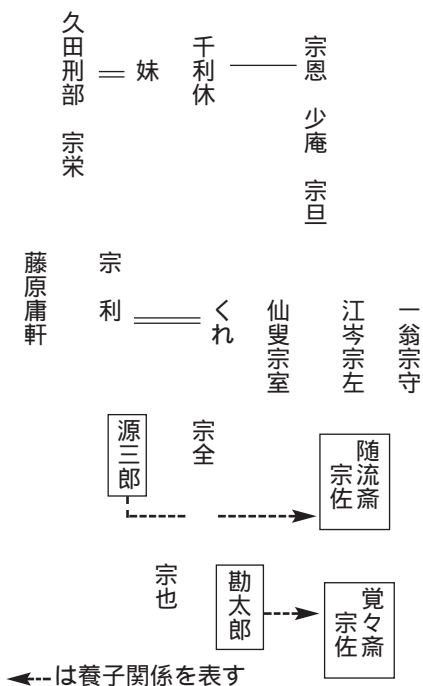
その庸軒に対して竹心は次のように批判する。

中此、藤村子、古へ二して其言行を指月集と号し、片々古実を

書のせ侍れとも茶の深奥にいたらず、(中略)初心をまど八す事、尤なげかしき事也、

とある。宗旦流と称しながら、批判の対象は実は藤村庸軒であつた可能性も考えられる。

千家・久田家相関系図



2 茶会の濫觴

中国の茶の先人達

有ル人、問而曰、茶の本朝にわたりて流布し、茶法之定り、茶會之興行し候はいつれの事二候や、一答て曰、有ル書に経説を引證し、茶の功德・因縁を稱し、竺土に出たる由を記されたりといへとも未詳、唐土にて八既二神農の食經に出たる事、陸羽ノ茶経、栄西之喫茶養生記に記されたり「養生記八茶種二添て鎌倉之右大臣實朝公二献り給ふ、」記に、茶八養生之

仙葉、延齡之妙術也、天竺・唐土ともに貴重すといへり、爾來、周・晉・漢・唐・宋・元・明之間、張孟陽・陶弘景之徒、是を賞美し、陸羽・盧同専らに嗜愛す、次て劉兎錫・白居易・范希文・司馬光・王安石・朱熹・林希逸・文徵明、其外諸賢之詩賦に賞しられし功能、陸羽茶經全書、宋西之養生記に詳也、

【大意】

ある人が次のように尋ねた。茶がわが国に伝わって普及し、茶の作法が定まり、茶会が興行されるようになったのはいつのことですか。

一、答えていうには次のようである。ある書物は、「經説」を証拠として引用し、茶の功績・徳行と發生についてはインド發祥説を掲げているが、これは未だ詳らかにされていない。中国においては、すでに神農の著した「食經」に茶が登場することは、陸羽の「茶經」、宋西の「喫茶養生記」に記載されている。「喫茶養生記」はお茶の種に添えて、鎌倉の右大臣源実朝公に献上されたものである」その「喫茶養生記」に次のように記されている。茶は養生の仙葉であり、延齡の妙術である。インドでも中国でも貴重品として認識されている。それ以来、周・晉・漢・唐・宋・元・明の各王朝の間、張孟陽・陶弘景などといった人たちが茶を賞美し、陸羽・盧同は専ら茶を愛飲した。ついで劉兎錫・白居易・范希文・司馬光・王安石・朱熹・林希逸・文徵明をはじめとして、そのほかの諸賢が詩に賦して賞した茶の機能については、陸羽の「茶經」と宋西の「喫茶養生記」に詳しく記載されている。

【語釈】

經説：朱筆にて「茶教、字美、方鑑茶伝ノ類」とある。ここでは茶に関する既存の辞書類を指していると考えてよい。

功德：功績と徳行。

竺土：天竺のこと。つまりインド国。

神農：中国古代の伝説的聖王。炎帝神農氏。医学の創始者として尊敬されており、人々に医食の方法を教示した「食經」という書物があったと伝承されている。

陸羽の茶經：陸羽は中国唐代の詩人。？～八〇四年。復州竟陵（湖北省天門県）の竜蓋寺で育つ。寺を出た後、李齊物・崔国輔に出会い、詩人皎然・張志和たちと親交をもった。「茶經」は乾元元年（七五六）～上元二年（七六一）の間に書かれた、茶に関する総合的解説書。

宋西之喫茶養生記：宋西は鎌倉時代の臨濟宗の僧。保延七年（一一四一）～建保三年（一一二五）。備中国吉備津の出身。姓は賀陽氏。号は明庵。葉上僧正・千光上人とも称される。二度の入宋によつて臨濟宗を日本にもたらし、その際に抹茶法も伝えた。博多に崇福寺を建て、將軍源頼家の庇護により鎌倉・寿福寺、京・建仁寺の開山となる。「吾妻鏡」によると、建保二年二月に体調の悪い將軍実朝に茶を服用させて回復させ、その際に「喫茶養生記」を献じた。「喫茶養生記」は初治本が承元五年（一一二一）に再治本が建保二年（一一二四）に成立。二巻本で上巻には茶の効能が、下巻には桑の効能が記されている。宋西は他に「興禪護国論」「出家大綱」などを著している。

張孟陽：晋の文人。諱は載。河北省安平の出身。晋の武帝に仕える。

「茶經」によると孟陽の「登成都樓詩」に「芳茶冠六情」の語あり。

陶弘景：四五六～五三六年。梁の時代の道士。丹陽秣陵（江蘇省江

寧(寧)の出身。諡は貞白先生。二十歳前から諸王の侍読となり、梁の武帝とも親交をもった。道教を学び、上清学派を形成する。また医学にも造詣が深く、彼の『神農本草経集注』は中国薬学の基本書となり、日本にも奈良時代以前にもたらされている。『茶経』所載の「陶弘景雜録」に「苦茶輕換膏、昔丹丘子青山君服之」とある。

盧同：?々八三五年。范陽の生まれ。唐の文人。玉川子と号す。仕官せず、読書を好み、清貧に甘んじた。陸羽と並び称せられ、「謝孟諫議惠茶歌」が茶人に重んじられた。

劉兎錫：唐の文人。白居易と交遊あり。

白居易：七二一〜八四六年。字は樂天、号は醉吟先生。香山居士とも称した。新鄭(河南省新鄭県)出身。二十九歳で進士に合格し、憲宗の側近の翰林学士となるが、徹底した政治批判・社会批判のため、地方官とされる。八二〇年、長安に召喚されるが、穆宗や高官たちの無能ぶりに失望し、自ら地方官を希望する。彼の政治的理想を歌い上げた詩は三〇〇〇首を超え、「白氏文集」として編纂され、日本にも大きな影響を与えた。

范希文：九八九〜一〇五二年。北宋の代表的政治家。范仲淹、字は希文、諡は文正。蘇州出身。一〇一五年、科挙に合格し、晏殊に抜擢されて宋州応天府の学校主事となり、一〇三八年、西夏方面の担当者となる。一〇四三年には副宰相となり、「士は天下の憂いに先んじて憂い、天下の楽しみに後れて楽しむべし」というスロガン掲げて改革を推進するが失脚する。

司馬光：一〇一〇〜一〇八六年。中国北宋の政治家、歴史家。陝州(山西省)夏県涑水郷の出身。字は君実、諡は温公。進士に合格し、皇帝近くに仕えるが、王安石と対立し失脚。王安石放逐後に宣仁

大後の抜擢で宰相となる。彼の信条は「道德的規範こそが至高」にあり、名教の実践例として『資治通鑑』二九四巻を著す。

王安石：一〇二一〜一〇八六年。北宋の政治家。出身は江西省撫州臨川県。字は介甫、諡は文公、荊公、臨川。科挙に合格後、六代皇帝神宗の抜擢で宰相となり、青苗法・均輸法などの新法を立案し、改革を目指したが失敗し、江寧府の鐘山に隠退した。彼の文章は「簡健」と評されるように、簡略な文章の中に明快な意図の表現がなされており、唐宋八大家の一人に数えられる文章の達人であった。

朱熹：一一三〇〜一二〇〇年。中国南宋の思想家。朱子学の創始者。

一一七八年、廬山の麓の白鹿洞書院を復興し、儒教教育のメッカとした。晩年は建陽(福建省)に考亭を設け余生を送るが、四方から学徒が集い、考亭書院と呼ばれた。朱子の著作は鎌倉時代初期に日本に伝わったが、広く流布したのは江戸時代に林羅山が朱子学を採用したことによる。

林希逸：南宋の進士。詩画書に通じた。

文徵明：一四七〇年〜一五五九年。明朝の代表的文人。字は徵仲、号は衡山・停雲生。二十歳の時に沈周に絵を学び、沈周とともに呉派文人画の祖と仰がれた。文官試験には落ち続けたが、自宅の停雲館で書画三昧にあけくれ、多くの文人と交際を広めた。代表作に「三題吉祥庵巻」「湘君湘夫人図」などがある。また『武宗実録』の編纂にもかかわり、著書に『甫田集』がある。

【解説】

日・中、とくに中国における茶の知見を著名な文人を紹介することで示している。たとえば伝説的人物である神農を登場させること

によつて、いかに茶が古くから身体によい飲み物であつたかの証拠として権威付けている。この部分はまさに初心者むけの解説的箇所である。その後、陸羽・張孟陽などの文人を掲げているのは、竹心の調査によるものではなく、『茶経』などを参考に、先学の成果を抜粋したものでなからうか。陸羽・張孟陽・盧同に関しては、下巻の「唐賢茶事詠略」にその漢詩を掲載している。白居易をあげながら陶淵明をあげていないのはいささか不思議である。

中国文人を権威付けに利用しながら、一方で栄西の『喫茶養生記』を挙げてきているのは、日本での濫觴がないと困るからであろう。翻つて考えると、日本には『喫茶養生記』以外に茶書といえるものがなかつたのかもしれない。今でこそ『山上宗二記』などをあげることはできるが、『山上宗二記』はあくまで個人的な伝書であり、人口に膾炙していたわけではなからう。

茶の日本伝播

一茶の本朝にわたりし事八、年久しといへとも、茶を本朝に植し八、人皇七十九代六條院仁安之比、建仁寺の開山栄西禅師「葉正僧正、千光國師、」入唐帰朝之時、茶種を将来し、筑前の背振山に植、それより都にうつし給ひしを、明恵上人乞て梅尾にうつ給ひし後、宇治の里人に賜て植ひろめ侍しと也、宋人ノ詩二、「幸二得二梅山信一始二日本ノ茶一、」

【大意】

茶が日本に伝わつたという事について、既に長い年月が経つたけれども、茶を日本に植えたのは七十九代六條院の御世、仁安（一一六六～六九）の頃で、葉上僧正とも千光國師とも称された京都建仁

寺の開山である栄西禅師が植えられたのである。栄西禅師は仁安三年（一一六八）四月に入宋、同九月帰朝、次いで、文治三年（一一八七）夏に入宋、建久二年（一一九一）に帰朝したのだが、二度目の帰朝の時に茶種をもたらし、筑前にある背振山靈仙寺に植え、それから都に移した。そしてその茶種を山城梅尾の高山寺の明恵上人が懇願したため贈り、それを明恵上人が梅尾の深瀬に植えられた後、宇治の里人にも分植させ、繁殖させていった。宋人の詩に、「思いがけず明恵上人の書信を得て、初めて日本の茶を飲んだ。」とある。

【語釈】

建仁寺：臨済宗建仁寺派の本山。建仁二年（一一〇二）に源頼家が栄西に寺地を寄進し、建設が開始。元久二年（一一〇五）に完成。京都五山の第三位。最初、京都の他宗を慮つて真言・天台・禅の三宗兼学としたが、円爾弁円・蘭溪道隆が住するに及び禅宗となつた。京都市東山区小松町に所在。

入唐：入宋のこと。栄西は仁安三年（一一六八）二十七歳の時に五月、元治三年（一一八七）四十七歳の時に五ヶ年、中国に渡り明州天童山で修行をした。

茶種：栄西は、二度目の入宋の元治五年に中国より菩提樹を送り、それが翌年香椎宮に植えられた。そのことが茶種将来伝承のもとであるうか。栄西の将来物が茶樹が茶種かで論争があつたが、最近では植物の茶ではなく、「抹茶法」という茶の飲み方に落ち着いている。

筑前の背振山：背振山は肥前と筑前の境界に位置する。伝承では宋から持ち帰つた茶種を、栄西がこの山の西ヶ谷付近に植樹し、それが岩上茶として広まつたという。ただし事実関係は不明。

明恵上人：承安三年（一一七三）～貞永元年（一一三三）。紀伊国高田の出身。法名は高弁。神護寺の文覚の弟子となり、建永元年（一一〇六）、後鳥羽上皇から梅尾山を賜り、高山寺を開創して華厳宗の道場とする。伝承に、栄西が宋より持ち帰った茶種の一部を譲り受け、梅尾に植え、茶を普及させたという。宋人の歌：不明。下巻の「唐賢茶事詠略」には梅尾山の茶の歌は見当たらない。

【解説】

茶の日本伝来の時期・過程を述べている。栄西が二度目の入宋より帰朝した際に茶種を将来し、その一部を明恵に与えたという伝承は『梅尾明恵上人伝記』に原点がある。そこには次の記事がある。

建仁寺の長老より茶を進せられけるを、医師に是を問ひ給ふに、茶は困を遣り、食気を消して快からしむる徳あり。然れども本朝に普からざる由申しければ、其の実を尋ねて両三本植糸初められけり。誠に眠りをさまし、気をはらす徳あれば、衆僧にも服せしめられき、或る人語り伝へて云はく、「建仁寺の僧正御房、大唐国より持ちて渡り給ひける茶の子を進せられけるを、植糸そだてられける」と云々。

また、成立年不詳の「千光祖師年譜」に

順徳帝建暦元年辛未、師七十一歳、春正月撰喫茶養生記、「割注略」初東帰時、携茶種来、植筑前州背振山、後與其種於明恵上人、植之梅尾、

とある。『梅尾明恵上人伝記』において、早くも栄西から明恵に茶種が譲られ、それを明恵が梅尾に植樹した骨子ができあがっている。そして「千光祖師年譜」では、栄西が帰国した際に、「筑前州背振山」

にまず茶を植え、その後、その種を明恵に与えるという風に、話が二段階に複雑化している。

一方、竹心が活躍していた同時代の史料としては、黒川道祐著の『雍州府志』（貞享和元年・一六八四）があげられる。そこには、

中世建仁寺開祖千光国師栄西、入宋得茶、而帰本朝、治源実朝公之余醺、明恵上人種茶実於梅尾、其所種之深瀬等園名、至今存矣、曾来朝層清拙正澄、興夢窓独芳、遊梅尾之詩中、称梅尾為茶山、

とあり、『雍州府志』は京都に住む竹心にとって入手しやすい書物である。竹心が直接参考にしたのはこちらかもしれない。本文の「宋人之詩」というのは不明だが、この『雍州府志』に、夢想疎石の詩が「遊梅尾之詩中、称梅尾為茶山」と紹介されているのは、直接ではないが、ある種の類似性を感じさせる。夢想の師は中国元朝の一山一寧であるのも、なんらかの関係を感じさせる。ただしここでは背振山や石上茶の伝承は登場しない。竹心は複数の史料を検索して書き上げた可能性がある。

付記

本稿は東京藝術大学大学美術館における茶書研究会の「源流茶話」購読の成果をもとに成稿したものである。